

巻 頭 言

今年度の前期は特別な時を過ごすこととなり、大学でも慣れないオンラインの授業や会議、行事、活動と次々と展開、夏期休暇を前によくひと息つけるところまでこぎつけることができた。ご存知のように COVID-19 は、世界中を揺り動かし、その状況下で新たな気づきや急速な展開によって、社会は大きく変わりつつある。それは、新しい可能性をみせてくれるだけではなく、現代の社会にうごめいていた課題を表面化させてきたことも事実であり、それが、人間の生命まで直接脅かすことも知らしめた。

研究の世界や学生交流では、これまで想像もしていなかったような国境を越えた繋がりがいとも簡単に進んでいる。国内の学会だけでなく、国際学会や講演会もオンラインで次々と展開されている。今まで、移動の時間を取れずに参加できなかった国際学会も時差を気にしなければ、どんどんと出席できる。遠くにいるはずの人が、身近で講演をしているようにも思える。もちろん、リアルの対面での国際学会も捨てがたいことは言うまでもない。発表者の熱意、参加者の意欲、開催の場での密な交流、それは楽しい時間を過ごすことができる。だが、どうであろう。オンラインの会議も捨てたものではない。そこここに、新たな知見や情報を受け止め、励まされる。

オンラインの授業はどうであろう。準備に奮闘し時間を要したが、学生とのコミュニケーションも、或いは、学生間のコミュニケーションも意欲次第では、かなり有益であることが、画面を通して、リアクションペーパーを通して、伝わってきた。授業の進め方の引き出しが増えたような気がして、楽しい。

パソコンに張り付いていると、デジタル・アーカイブをみる機会が自然と増えてきていた。あっという間に、研究史料のデジタル化は進んでいたことに気がつかされる。筆者は国際関係を研究しており、かつては、研究のためにドイツ、ラトヴィア、イギリスなどの文書館で、丁寧に薄紙で修復されたドイツやラトヴィアの 100 年以上前の外交文書史料を読みながら一つずつ手書きで写していた。書き送った外交官や書記から伝わる様々な情報や緊迫感に想像を膨らませながら読み写し、気が付くと閉館時間ということもあった。現在もすべてがデジタル化されているわけではないが、自分のパソコンに向かいながら当時の国際社会の一端を想像することは可能である。昔、先生から、鼻につくような古い紙の匂いや建物の匂いが夢に出てくるぐらい丹念に読み込むことが重要と言われたことも懐かしい。オンラインで匂いが届く時代もそう遠くないのかもしれない。研究書をめぐりながら、史料の世界を検索するのは楽しい。こんな時こそ、きちんと研究に向き合う時間を作りたい。実際に現地で史料を手に行き届くことができないこの夏は、デジタル史料を活用し、自分なりの進歩を確かめながら、次の文書館の訪問に期待して論文執筆に向かおうと思う。

さて、全学科から投稿可能な本号に収録された論考は、歴史、文学等の時代や空間を超えたものから、まさに今を考えるテーマ、消費の志向について、日本の女子大学での学生の英語の学びについてなど、多岐にわたる。振り返って、大学の紀要の果たす役割について考えてみると、大学が教育と研究の両輪をもって、教員・学生が相互に刺激しあい、切磋琢磨するものだ痛感する。そのひとつの土台としての役割を大学紀要が果たしているのではないだろうか。今は、論考を通して、執筆者とのコミュニケーションをする時である。対面でディスカッションできる日を心待ちにしている。

(志摩 園子)